

森崎東を偲ぶ

2020年7月16日死去 享年92歳

異端の監督森崎東が亡くなってから8か月が過ぎた。1956年松竹に入社後、69年『喜劇・女は度胸』で監督デビュー。権力者を極端に嫌い、虐げられている庶民の視線で作品を作り、泥臭い、猥雑で、ごった煮の独自の森崎喜劇を創り上げた。しかし、それは次第にメジャーのプログラムピクチャーには馴染まなくなり、後半は独立プロで撮ることが多くなった。最晩年になるとそれまでの創作力が凝縮したような珠玉の作品を残した。ここにささやかながら彼の業績をレビューし追悼としたい。

編集部

森崎東のこと

藤田明 映画評論家

森崎東を追悼する短い文章は、「伊勢新聞」7月27日「シネマ近見」欄の終わりに記している。まず、少し補って、それを示しておこう

※

7月16日の夜、森崎東が亡くなった。三重とも関係があり、感慨を抱く。短いながら何項目か挙げて見たい。

①1927年島原に生まれ、大牟田育ちの九州男児である。

②大牟田商業卒の翌年が敗戦の年。8・15の翌朝、海軍少尉だった兄の湊は香良洲海岸で割腹自死した（香良洲の歴史資料館の展示に登場。三島由紀夫は著作で触れているのだろうか）。

③54年、京大卒のあと松竹京都撮影所へ入社。のち閉鎖に伴って大船撮影所へ。野村芳太郎に就き、山田洋次の初期作では山田との共同脚本もいくつか。

④『吹けば飛ぶよな男だが』（1968年）は、初期の山田最高作。森崎の助力も再確認の要があるろう。

⑤『男はつらいよ』第3作（1970年）は森崎の単独作で、湯の山ロケも。山田と作風は違う。

⑥庶民の中の怒りは喜劇・女シリーズなどで爆発。ATGで作った『黒木太郎の愛と冒険』（1977年）には②の

一件も登場した。

⑦最後の『ペコロスの母に会いに行く』（2013年）は秀作だった。②と向き合った次作の構想もあったようだが。

※

以上のような次第ながら、若干補足したい。

②に三島が登場するのは、「シネマ近見」この問いの主な部分がドキュメンタリーの『三島由紀夫vs東大全共闘』批判だったことにもとづいている。つまり自死した三島が湊を意識していたかどうか。

④に関して。公開年の年間回顧として、『吹けば飛ぶよな男だが』を伊勢紙上で激賞し、思い余って、当時親しかった一宮の森卓也（アニメーション映画研究家）に送った。すると彼はそれを山田監督へ送ったとのこと。のちに礼状が来たとも知らせてくれた。礼状の文言を今では覚えていないし、私の方へ直接来たわけではない。当時、森崎東は監督以前で、まだ世に知られていなかった。後から思うと、例えば作のラスト、人物の複雑な表情は山田の、と言うより脚本段階で森崎との協業の成果に違いない。

⑦と関連して、『ペコロスの母に会いに行く』の公開前後、E TVで森崎東特集を見た。ニュースを先頭に大方が劣化いちじるしいNHKの諸番組の中では珍しく記憶に値するドキュメントだった。殊に茅ヶ崎海岸での次作のシーンに通じるような部分は、まさに兄・森崎湊と関係深い香良洲

そのもの。井上和男『生きてはみたけれど』小津評伝作品の監督）が二度と訪れたくないと言い、色川大吉もかわりのあった航空隊。朝日津総局にいたK女性記者は東京本社勤めの頃、茅ヶ崎の森崎邸に、インタビュで赴いた、と語ってくれたことがある。私なども一度は生身の森崎東に会い、香良洲問答をしたかったと思う。名古屋のキノシタホールへは、『生きているうちが花なのよ・・・』（1985年）や『ニワトリはハダシだ』（2004年）など、今や閉館になってしまったそこへわざわざ出かけて見たのであるが、彼がトークで来た時に限って行けなかったのだ。

言い添えるなら、映画雑誌の森崎追悼は現場関係者の回想ばかりで、作品を論ずる類を殆ど欠いていた。そのあたりを批判したくなるが、一方で自分を振り返った場合、今いちど森崎の映像に接しないことには、との思いに駆られない。ありありと見た時の記憶が甦るといふ風にはいかなない。辺りが森崎映画の特徴なのかもしれない。瞬時に爆発する怒りなどがそうさせているようにも思える。

とにかく山田洋次の中期以降の作風とは対立的。両者の間にたとえ友情的つながりが現実にはあったとしても、映画史的にはそう見るべきだろう。この仮説を許述するには大きなエネルギーが求められそうである。

「女シリーズ」と私

西松優 スタッフ

私は大学時代「女シリーズ」を観て、森崎東監督のファンになった。最近大学時代所属した運動クラブの当時の部誌を読み直していたら、その中に森崎東監督について私が書いている文を発見した。稚拙な上に肩肘張った文章だが私の当時の彼への熱情とその魅力を素直に表現しているように思えたので少し長くなるが紹介させていただく。この時代は一九六九年にピークを迎えた大学紛争が終息しつつあったが、その余韻は色濃く残っていた。私はクラブ活動に忙しく学生運動には関係しなかったが、当時の大学を覆う雰囲気から影響を受け「連帯」「民衆」等当時よく使われた言葉が用いられている。以下は、女シリーズ二作目を観て、一九七二年十二月頃部誌に寄稿した一文の抜粋である。



森崎東監督の魅力は優秀者に対する劣等者の造反であり、劣等者の居直りの論理の主張である。(中略) 山田洋次監督のいうところの「まちがった世の中にあつて笑い話の形を借りて伝える真実」ではなく、辛辣な劣等者の強烈な自己主張の中の真実を彼は求めてゆく。

(中略) 世の中のおおよその映画というものは美男美女

が出てくるが、世の中で美女というのは百人のうち、一人か二人いるかないかで、あとの九十八人の方が重要であり、森崎映画は常に九十八人の手ごたえを求めようとしている。彼の映画は、健さん(補…ヤクザ映画の高倉健)のようにかっこうよくないし、寅さん(補…『男はつらいよ』の車寅次郎)のように「かっこう悪くなく」(実は最もかっこういいが)、また左翼映画のように人民は常に善であるといった作り方はしない。彼のワンショット・ワンショットは人間をもっと意地汚くて、助平で、欲張りで、ケチであり、それを是認した上で民衆(≡劣等者)への本当の連帯を求め、彼らの人生賛歌をうたいあげる。

(中略) 例えばストリップパーのような底辺に生きる「心やさしき現代の大和撫子」を登場させ、山田洋次の描くような根っから人のよい庶民だけを登場させるわけではない。彼の映画の中で、一番好きなのは『喜劇 女は男のふるさとヨ』である。このストーリーはストリップパーの斡旋所「新宿芸能社」を中心とした人間関係、即ち経営者夫婦の金沢(森繁久彌)と竜子(中村メイコ)、ストリップパーの笠子(倍賞美津子)と星子(緑魔子)を中心に場面は展開していく。

森崎は山田の描く教養はないが人情味があり一定の良識ある庶民(≡古典落語の人物)を超越し、スタートにおいて、はや、国電の中で学生が笠子に痴漢行為をすると、「学

生さん遠慮しないでもっとお触りヨ」と良心的に(?)笠子に言わせ、山田に欠落している庶民のバイタリティ、えげつなさをあけすけに示す。ここに登場する人物は山田のように「人のよい庶民」という枠にはめられた人々ではなく色々な個性を持っている。

星子が、ある陸橋で受験に失敗して自殺寸前の高校生に出会い、セックスの楽しさを覚えれば自殺を思いとどまると身体を貸し、雪の中で青カンし、売春容疑で警察にあげられる。竜子が事情を聞いて「泣いている子供にガムをやればほめられるが、身体しかない貧乏人はかわいそうだと思つて身体を貸してやっても罪になる。つまらない国ですね！」と警察にぼやきながら、その状況を想像する。その想像した雪の中の青カンシーンの星子の表情を大写しにするショットは、ジンとくる。(中略)

しかし、その続編であるといえる『喜劇 女生きてます』では森崎は全くやる気をなくしたのだろうか。左幸子、久里千春のミスキャストを始め、孤児院で知り合った好子(大楠道代)とヤクザの梅本(橋本功)との短絡的な連帯はうなずけないし、ラストシーンの梅本が刑務所から出所し、好子と歩きながら、はずれた声で歌う「インターナショナル」の小節の繰り返しは、我々に安易な連帯を求めてしまう。(中略) 森崎はやはり山田のヒューマニスティックなユーモ

ラスな庶民でなく劣等感を背負い、居直りが得意な民衆を描く時その真価を発揮する。



以上が学生時代に私が書いた文章である。

森崎東監督(以下、森崎)は生涯二十五本の映画を作った。「女シリーズ」全四作は森崎作品の前期に属するが、その全ての脚本を書き監督をしており彼の特徴をよく表わしている作品群だと思う。このシリーズは『喜劇 女は男のふるさとヨ』『喜劇 女生きてます』『喜劇 女売り出します』と『女生きてます 盛り場渡り鳥』の四作だが、ビデオ化されているのは三作目までであり、それを今再見してみることにした。

このシリーズは言ってみれば人情喜劇の一種であるが、性を普段着のように扱い日常的に猥談が語られる雰囲気の中で、女たちを中心に「笑い」と「怒り」が交差するのが特徴である。そして性を全面に出しながらも喜劇のためかきわどいシーンは一切ないのも特徴である。

まず登場人物だが山田洋次監督(以下、山田)『男はつらいよ』の「庶民」に対し、女シリーズでは底辺に生きる「ストリップパーたちとその周辺の人たち」であり、その多くは更にその下からはい上がったり助けられてそこにたどり着

いた若い女たちである。主役で中心となる女たちは二つの類型に分かれる。一方がどんな逆境でもバイタリテイに溢れ女の自由と自立を求め行動する女たちであり、男にほれっぽい笠子（倍賞美津子・一作目）、インテリの幾代（吉田日出子・二作目）、元スリ出身の浮子（夏純子・三作目）が体現する。また対極として、主体性はないが聖母のようなやさしさを持つ女たちがおり、少し頭の弱い星子（緑魔子・一作目）とポチ（久万里由香・二作目）、結局ヤクザとの腐れ縁を選ぶ好子（大楠道代・二作目）である。この映画に登場する男たちは、皆弱弱しく女々しく影が薄いか、不器用で社会に順応できない者たちである。

次は家族とその舞台を見てみよう。『男はつらいよ』では自分の肉親である「実の家族」であり舞台は門前町にある団子屋だが、女シリーズでは血のつながりのないストリップパーたちとその斡旋業夫婦の「疑似家族」であり、舞台は新宿のはずれのわい雑な地区に立つ新宿芸能社という看板のかかる古びた家である。子のない経営者金沢夫妻は、口は悪いがストリップパーたちを子どものように可愛がりその行く末を心から心配してやる。彼女たちも父さん、母さんと呼び本当の両親のように慕っており、遠くにおいても正月に帰るのを楽しみにしている。彼女たちは育った環境が貧しく親にも恵まれず、社会に出てからもつけ込まれ利用さ

れたり適応できない「居場所のない娘たち」であり、新宿芸能社は「鳥が帰ってくる巣」のような存在なのである。

このシリーズは、一見若い女たちが主役のように見えるが、よく見ると二つの大きな柱がしっかり支えていることがわかる。経営者の金沢（森繁久彌）と妻竜子である。森繁は甲斐性なしで気が弱くトルコ風呂好きのぐうたら亭主を絶妙に演じている。竜子は口は悪いが、気丈夫で常に若い娘たちを気遣う母親のようなキャラクターだが、一作目の中村メイコは明るくて話好きに、二作目の左幸子は腹が座って勝気に、三作目の市原悦子はその中間でそれぞれ芸達者らしくその持ち味を十分に出している。このベテラン夫婦役俳優たちのお陰で、その胸を借りて若い主役の女優たちが渾身と演技しキラキラ輝いているのがわかる。

森崎の映画は「怒劇」とも呼ばれているが、このシリーズでも怒りの場面が多く見られる。例えば、一作目で笠子が暴力団の元ヒモに拉致され、取り戻しに行った金沢が重傷を負い、怒り心頭の竜子は肥桶を持って行き暴力パーの中に糞尿をぶちまける。そして驚き外へ出てくるチンピラを、ハンドバックに模した金属塊で、怒りを込めて殴り倒すシーンは痛快だ。前述した青カン星子の逮捕にも警察に大きな怒りをぶつける。三作目では、竜子が百貨店で買物中、上品そうな女に財布を掏られ、元スリの浮子がそれに

気づき女から拘り返し警察に逮捕される。その上、上品そうな女の言葉は信用し、竜子たちの話は一切無視される。竜子は警察署で容姿だけで判断し誤認逮捕したことに怒り狂い強く抗議をする。

この映画ではエリートやインテリはあまり登場しないが、第三作で浮子を好きになり追いかけて回す税務署員（小沢昭一）が出てくる。しかし、道化師のようなドタバタの役回りをさせ笑いの的になっている。劣等感の裏返しで彼らを嘲笑する森崎監督の劣等者賛歌が垣間見られる。

女シリーズ四作の中では、一作目の『喜劇 女は男のふるさとヨ』が今見ても一番よくできていると私は思う。それは森崎と山田の共同脚本だからだろう。この二人には多くの共同脚本があるが、『なつかしい風来坊』『吹けば飛ぶよな男だが』『男はつらいよ』（第一作）のような二人の持ち味がベストミックスされた傑作が多い。この映画ではバイタリテイ溢れ生きる笠子と頭は少し弱いが限りなく素直でやさしい星子という異なるキャラクターを対照的に描くが、主役も脇役も生きざまが想像できる練れた人物造形となっている上に、挿話に主張を込めている。そのよく出来た人物像を二人の女優が乗り移ったように見事に演じ切る。特に緑魔子はその魅力を『吹けば飛ぶよな男だが』に続き全開させている。また、『馬鹿まるだし』や『二等兵物語』の

笑いのパターンをさりげなく使い笑わせる。この作品は森崎と山田の特徴が上手く混ざり合う人情喜劇の佳作である。しかし、山田と離れた森崎の二作目以降の女シリーズは『喜劇 女は男のふるさとヨ』に比べると情感も笑いのキレも大きく劣る。しかしそれなりに楽しめる喜劇となっている。

映画はその時代にもはやされ高い評価をされても、時代が移り価値観・社会観・世界観が変わってから観直してみると意外につまらないことも多い。この女シリーズを約五十年ぶりに観直してみたが、当時とは大きく価値観が異なっているがやはり面白さについては変わらなかった。それはイデオロギーでなく、人間の本质を描いているからだろう。古今東西「人間の本质」は変わらない。「女シリーズ」は普遍的な映画なのだ。

森崎はその後松竹を離れてからも映画を作り続け、二〇一三年公開の『ペコロスの母に会いに行く』が遺作となった。森崎の集大成とあっていい映画である。認知症の母と息子の物語であるが、認知症の老母の現実・過去が混濁する思い出の風景が抒情的に語られ、子の母への情が見る側にジワジワと沁みだす素晴らしい映画に仕上がっている。老境の域に達した森崎の心象風景が垣間見られるようだ。私はこの名作に甚く感動した。

森崎監督は二〇二〇年に逝去された。今はご冥福をお祈りするばかりである。

『黒木太郎の愛と冒険』

安井 文 謎の美女

1977年 ATG 110分 監督・脚本 森崎東

出演 田中邦衛、財津一郎、倍賞美津子

冒頭、唐突に森崎東監督が3人の若者に謝辞を述べ紹介する。これはドキュメンタリーなのかと困惑していると、若者たちが自己紹介を始め、とりわけ印象的な風貌の伊藤裕一さん演じる銃一が独特の滑舌に苦み走った声で、田中邦衛さん演じる黒木太郎こと文句さんのことを語り始める。そこでやっぱり映画なのだとはっとした。

ボンネットに日の丸をつけたジープ、文句さんが絶妙なハンドルさばきで車をすり抜ける。スタントマンを生業とする文句さんの最近の楽しみはゲリラごっこ。怪しい言動で警察官達を翻弄するはずら好きのかつこいいおっさんどこか泥臭いモノクロ映像とそこに重なるシンプルな音楽がかっこいい。一般道でのカースタントや電車のくだりから感じるスリルと緊張感がリアルだ。撮影自体がゲリラ的に行われたのだろうか。

この映画が公開された頃、子供だった私の記憶の片隅におぼろげながら残っている懐かしい風景や風俗に似たものがたくさん出てくる。それを見ているうちに「空気と匂い」がよみがえった。今はもう目にすることが出来ないその頃の時代が映り込んでいる。

人情に厚く、困っている人をほっておけない文句さんの行動は直感的で破天荒で奇天烈。そして乱暴だ。伴淳三郎さん演じるゴメさんの一件はうまくいかなかったし、その罪滅ぼしのために杉本美樹さんと岡本喜八監督（！）演じる娘夫婦の営む理髪店を助けようと緑魔子さん演じる女教師に対して実行した解決法は、あり得ないほど乱暴だ。挙げ句の果てに自分のほうが救われたなどと言い始める始末。どこか空回っているその行動にあきれて笑ってしまう。

作中最も衝撃的なのは、銃一の父が言い争いから衝動的に切腹するくだりだ。銃一を探して財津一郎さん演じる菊松のところを訪れ、指を串刺しにしたオモチャを見て息のみ驚愕する三國連太郎さんの佇まいは悲惨で鬼気迫るものがあつた。無責任にはやし立てる男達と銃一の対比。居酒屋で徐々に高まる緊張感。唯一ふたりの関係を知っているとと思われる女将の一瞬の表情で悲惨な結果を察してしまふ。

映像では見せなかったその瞬間は、幼子をしっかりと抱き

しめた倍賞美津子さん演じる牧子と銃一が鶴ひろみさん演じる和美の浅はかな行動（と言いつ分がまた驚くほど現代的）により、瀕死となった文句さんの元へ向かう電車の中で、銃一が形見の「遺書」を黙読するというかたちで再現される。電車の音だけが響くこのシーンは息もつけぬ緊迫感だ。牧子と沖山雪子さん演じる満江のこわばった表情が差し込まれることで、電車の音はカウントダウンに聞こえてくる。その後、続く結末は少々うまく行き過ぎな感があるが、これは映画だ。作り話なのだからそれでいい。

あまりにもリアルな「遺書」の表現に鳥肌が立ち鑑賞後に調べると、それは森崎東監督の実兄の作品だと知る。終戦翌日のその経験が、この作品のそもそもの発端なのは明白で、監督自身が銃一なのかもしれない。作中のどこか圧縮された思いが吹き出しているような感じはそのせいなのだろう。

この作品が公開されたのは高度成長期が終わりを告げる頃だが、それでもなお戦争の影は色濃く残っていたのだろうか。モノクロの映像がひときわその陰を濃く映す。

軽い調子で観たことを後悔するほど深く心に突き刺さる作品だった。

『ニワトリはハダシだ』

林久登 スタッフ

2004年 ギナドゥー 114分

監督 森崎東 脚本 近藤昭二、森崎東

出演 肘井美佳、浜上竜也、守山玲愛

なんでもありの森崎ワールドの楽しさ

笑って観ているうちに、いつの間にか涙がにじんできてくる。そんな可笑しさとペーソスを誘う森崎ワールドの114分だった。

舞鶴に住む、知的障害者の15歳のサム（浜上竜也）は、潜水夫のチチ（原田芳雄）と2人暮らし。彼の教育方針を巡って考え方を異にする在日韓国人のハハ（倍賞美津子）と妹チャル（守山玲愛）とは別居中だ。そんなサムは人並み外れた記憶力を持っている。だが、それが災いして彼は、国の汚職事件に巻き込まれる。証拠資料が、ヤクザから国に贈られたベントの中にあり、その中の機密帳簿の数字をすべてサムは覚えていたのだ。サムの口封じを企てる警察とヤクザに対し、養護学校の担任教師の直子（肘井美佳）や、チチ、ハハは、体を張って守ろうとする……

是枝裕和や山下敦弘もそうだが、森崎は子供の扱いがうまい。サムとチャルの兄妹の組み合わせは楽しい。知的障

害者で記憶力が抜群の子がいるというのは、よく聞くが、サムはまさにそんな子なのだ。森崎が知的障害児を主人公にこの映画を撮ろうと決意したのは、ある障害者の母が言った「私は障害者として生まれた自分の子供を隠そうとは思わない。実は、見ていてこんなに面白い子供はない。皆さんにお見せしたいぐらいよ」(映画芸術409号)という言葉だったと言う。だから彼の、人間観察は鋭い。サムの思いもよらない行動、発作を起こした時の手のつけようがない暴走。障害者のありのままの姿を撮っていて衝撃的だが、よく考えてみると、日頃抑制に馴れている私たち人間の本来の姿ともいえる。

何か事が起きると、ずっこける養護教師の直子だが、生徒に対するひたむきな思いは切ないほど伝わって来る。直子役の肘井美佳は、役者くささがないところがいい。新人警察官の加瀬亮とのぶつかり合いも面白い。この新人警察官は、先輩警官(塩見三省)とコンビを組む。しかし、この2人も普通じゃない。体制側にどっぷり浸かった先輩にいつもねじ伏せられながら、果敢に行動する若者の姿は爽やか。

森崎は、一見ドタバタ喜劇を撮っているように見えるが、終戦直後、陰謀説のある浮島丸沈没事件の生き残り韓国人にハハの母(李麗仙)を登場させたり、国家権力と裏社会

との結びつきなどを正面から描き、小気味いい反骨精神を見せている。

一方では、「乙姫さまの臍のした、鯛や平目の臍のした、ただめずらしい臍の下……」こんな猥歌を大人、子供を問わず日常歌う。森崎しか出来ない奔放な発想だ。

森崎の何でもありの映画は楽しい。彼の言葉「僕は一升瓶についつい二升入れてしまうくせがある」確かに、盛り沢山の出来事が詰め込まれていて少々混乱するが、その映像空間には彼でなければ撮れないペーソスがある。それが見る側の琴線に触れるのだ。

この映画の変な題名『ニワトリはハダシだ』は、最近、物を公平に見るとか、差別をなくそうとか、当たり前のことが社会から失われつつある。そんな風潮に抗い「当たり前前」のことを当たり前前」という意味を込めてつけられたという。なるほど。

「私が選んだ日本映画100本」(2016年)より転記

つぐのぶ 小谷承靖監督追悼

2020年12月13日 死去 享年84歳

『ホワイト・ラブ』の思い出

小林竜雄 脚本家

今年の一月四日の午後、NHKのBSシアターで『ホワイト・ラブ』が放映された。去年の十月十二日の夜に放映されたばかりだったから早いな、と思ったのだが小谷承靖さんが十二月十三日に八四歳で亡くなったばかりだったからこれは追悼番組だな、と勝手に思うことにした。この作品の選択はよかった。『ホワイト・ラブ』は何年かの前の年賀状でも観返した、と書いてよこしていたから小谷さんにとって愛着が深い作品だったからだ。

高校時代、邦画で見たのは東宝の青春映画が多かった。周りに日活の鈴木清順に入れ込んでいる者がいたが私は特に見たいとは思わなかった。恩地日出夫では『めぐりあい』と『伊豆の踊子』、森谷司郎では『兄貴の恋人』と『赤頭巾ちゃん気をつけて』がよかった。特に、森谷には近いものを感じていた。小谷さんでは『はつ恋』を見ていた。だが、

どの作品も東宝風の上品さでまとめあげてしまうのには不満が残っていた。それが藤田映画にはなかったので私は次第に惹かれていったものだった。

その撮影の時に印象深かったことが二つある。脚本を書くので初めて小谷さんと会った時、「小林くんは、こういうのに興味がないと思ってたよ」と率直にいわれたことだ。

“こういうの”とは百友(百恵・友和)映画のことだ。私がアイドル映画には興味がないと思っていたようだった。百友映画は若い世代に人気があつてシリーズとなっていたが私の脚本(『もつとしなやかに もつとしたたかに』)からイメージするものとは違ふと思つたからだろう。百友映画で見たのは一作目の『伊豆の踊子』だけだった。

私は「そんなことはないですよ。凄く興味があります」と答えた。それはこの仕事は藤田さんから『しなやかに』の撮影中に頼まれたものだったからだ。藤田監督と一緒に、これまでのようにパターン化された文芸アイドル映画にはならないと思つた。

前作の大林宣彦監督の『ふりむけば愛』で初めてオリジナル脚本となつて過去の文芸作のリメイクから“現代の若者”を描く方向になつていたことも背中を押した。それで『ふりむけば愛』を見て、これならもつと新しいことをや

れると思った。

もう一つは、私の書いた第一稿を基に藤田さんと目黒の雅叙園の一室に籠って決定稿を検討している時のことだった。

そこに小谷さんが様子を見に顔を出したことがある。ちょうど主人公の男女が買い物袋を抱えて坂道を歩くというシーンのところだった。小谷さんは買い物袋がこぼれてレモンが坂にいくつも転がっていくというアイデアを出した。

私は映像的には面白いが、どこかで見たイメージだと思っ
てどうかと思った。すると藤田さんが「ううむ、まっ」といって独特の反応を見せて首を振った。違うというのだ。私と同じ意見だった。私は、ここが藤田映画のこだわりだと思った。だからといって小谷さんのが劣ったとも思わなかった。エンタメ志向の小谷さんらしいイメージだな、と思ったままで。演出面でいえば、二人が車を飛ばしているのに急にスクールが降り出すというシーンはジュール・ダッシンの『死んでもいい』のイメージだといっていた。私にはここに二人の監督の作風の違いが出たと思った。

小谷さんは先鋭な青春映画を作っていた三歳年上の藤田さんを尊敬していた。それはそばで見ていて気持ちのいいものだった。

“二十代の私”を知っている人たちが次々と亡くなっていく。淋しいかぎりだ。

生き続けるということはこういうことを引き受けていくことなのかもしれない。

小谷監督と四日市

林久登 スタッフ

あまり知られていないが、小谷承靖監督は1973年に『ザ・ゴキブリ』（ゴキブリ刑事・石原プロ）という映画のロケで四日市に来ている。石化コンビナート企業の暗部を暴く当時としてはめずらしい社会派映画だ。一口でいうとコンビナートから出る汚染物質の虚偽報告の不正を無頼刑事が正すという物語だ。コンビナート企業OBである私は、当時、すでにこんなリアルな作品が作られていたのか、と衝撃を受けたものだ。

霞の緑地公園にあるオーストラリア館前（現在は撤去されてない）で渡哲也（刑事）と南原宏治（某化学会社重役）が対決し、派手な爆発火災シーンがある。港近くの現存する老舗料亭「浜松茂」が黒幕の密談場所として使われている。又、津の旧県立医大（塔世橋の近くで現在は県警本部になっているところ）の看板が「三重工業大学」に書換え

られて出てくる。当時の身近な建物や場所が形を変えて出てきて懐かしい。

後に小谷監督に何故四日市を選んだのかと聞くと、「日本有数のコンビナートのある四日市は全国から多くの人が集まってきた。そこには必ず人間ドラマがあると考えた」という。さすが、映画と言うクリエイティブな仕事をしていくだけに、着眼点がすごい。

東京での併映が（当時はまだ2本立興業時代）奇しくも四日市出身の映画監督藤田敏八の『修羅雪姫』で2人は実は飲み友達だった。当時の東宝のドル箱映画、山口百恵と三浦友和の『ホワイトラブ』では藤田と若手の小林竜雄がシナリオを書き小谷が監督をしている。私は小谷の作品の中では、吉永小百合や山口百恵のスター作品でない三島由紀夫の5作目『潮騒』（1985年、堀ちえみ）が好きだ。2007年になると「藤田敏八没後10年映画会」（津総文）に赤座美代子と一緒にゲストとして来てもらった。小谷監督は藤田と同じ東大出の（大江健三郎、久世久彦らと同期）秀才だが、偉ぶったところがなく、映画監督にしては珍しく穏やかな紳士だった。前夜の酒席で私と赤座が揉めた時も、どちらにも肩入れせずニタニタしていたのを出す。精神的には無頼派だったと思うが……。 （合掌）